

地域のつながりと啓発

「はるよ こい」という会報に、京ちゃんのお母さん、林有香さんが2回にわたり、表題のテーマで寄稿している。重い障害を抱えながら、元気に小学校に通う4年生の林京香さんをめぐる「悲しい出来事」から話は始まる。

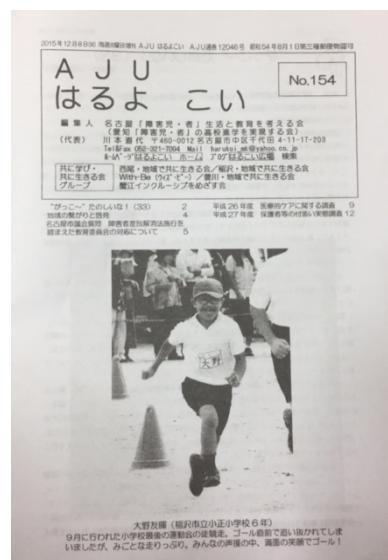
昨年9月末、瑞穂区全体の「子供会まつり」があった。家族揃って出かけるつもりが、こんなメールが届いた。体育館2階のバルーンアートと校庭でのグランドゴルフは困難なので、スタンプラリーだけの参加でもよいか。工夫があれば、すべて参加できると返事をしたのだが。「条件付き」参加内容を聞かされ、楽しみだった気持ちが不安に変わった。

社会福祉協議会でボランティアを探してもらい、当日は京香も楽しむことができた。2階への移動には、小学2年の男の子も手伝ってくれた。京香はバルーンアートが一番楽しかったようで、家族も嬉しかった。でも「これにて一件落着」とはいかず、悲しいメールをもらったりした。地域とのつながりの厳しさを痛感した。

こんどは10月の毎年恒例の町内会のお祭りでのことだ。ある方がこう話しかけて来られた。「子供会の中では、京香ちゃんに何かあったらと心配な人もいる」ことを伝えてほしいと言われている。「それを伝えたかどうか、あとで私が確認される」と。その話を京香の前でされたので、京香の頬から涙がポロリ、ポロリ。楽しかった思い出が涙に変わってしまったのが、母として大変残念で、地域の助け合う心が欠けていることを実感した。

会報ではその後、民生委員、児童委員、PTA、市役所の地域ケア推進課との話し合いを紹介し、最後に「地域での啓発の重要性」について、こう述べている。

私たちが「今までの慣行を変えてほしい、地域に啓発してほしい」と合理的配慮を求めたとき、地域の不安を私たちにぶつけるのではなく、私たちの立場になって仲介していくことが学校、地域関係者の重要な役割なのでは。意図せずとも、地域の人との溝を深めることになっては意味がない。ハンデがある人の身になり、まわりの地域住民との仲をつなげる役割こそ大切だ。辛い出来事ではあったが、地域のつながりを考えてくださる方と出会えてプラスだったと、発想を転換している。こうした体験も、地域で生きているからこそその出来事なのかもしれない。



(2016年1月22日)